

# 幼兒に聞かせるお話 冬どもりのお友達

附屬幼稚園 町田 行子

三八

道夫さんはとても元氣なお坊ちやんです。冷い北風が、ヒュー／＼笛を吹きながらおもてを馳けまはつてゐる朝も、お庭に出て参りました。地面が白つぽく見えて、少しかさ／＼に盛り上つてゐる様です。道夫さんが歩きますさ、サク／＼／＼／＼小さな音がして、お靴の跡が凹んでつきます。道夫さんは喜んで歩きまはつて足跡をたくさんつけました。でこぼこ地面になりました。

盛り上つた土をさげて見ますと、下から霜柱が出て來ました。すき／＼ほつた細い氷の棒が、たくさん集つてゐてもきれいです。

冷い北風に頬つぺたを眞赤にした道夫さんが、土をさけて霜柱を掘り出して遊んで居りましたら、ふと、そこに小さな穴があるのをみつけました。小さな深い穴で、中は眞暗で何にも見えません。何の穴かしら？と棒を入れて見ますと、中から誰か／＼棒を引張つて、

「道夫さん、おもては寒さうですね。この奥には廣いお國がありますが、こゝはとても暖かいのですよ。冬が來て

おもてが寒くなるよ、多勢のものが私のお國へお仲間入りに來るのです。道夫さんもお遊びにいらつしやい。今、戸を明けてあげませう。」

さいふ聲がしました。

道夫さんがびつくりしてゐますと、ガラ／＼／＼／＼重い戸をあける音がしたかと思ふと、地面に大きな穴があいて、そこには眞黒いお洋服を着て、黒い眼鏡をかけた黒いおぢさんが立つてゐました。

「さあ、私の後についていらつしやい。」

さ暗いトンネルの様な道を／＼歩いて行きますので、

「おぢさんはだあれ？」と聞きますと、

「私はね、地面の下に住んでゐるもぐらさいふものです。

外から悪いものが入つて來ない様に、戸をしめて鍵をかけて番をしてゐるのですよ。道夫さんはいゝ子だから、今日は私のお國を見せてあげませう。道夫さんのお友達がゐますよ。」

と先に立つてズン／＼歩いて行きます。道夫さんはお友

達つて誰かしらに思ひながらついでに行きました。

暗い細い道で、所々にあたりがついてゐます。細い道はいくつかまがつて、今度は廣い道に出ました。もぐらのおぢさん三竝んで歩いて行きます、可愛いお家の前に来ました。

トン トン トン 「おめんください」

戸を叩きます、暖かさうなお洋服を着た小さな蟻さんが出て来ました。

「あら、蟻さんのお家はこゝなの？ 蟻さんは暑い夏に皆でセツセコく歩いて、キャラメルやお菓子のかけらや小さい蟲なんかのお荷物を運んでゐたのね。僕、蟻さんのお家を見つけようと思つて、何度も地面の穴に指を入れて掘つてみたけれど、いつも土がくづれてお家が見つけられなかつたの。蟻さん、此の頃は一寸も出て来ないから、さうしたのかと思つてゐたの。」

「まあ、道夫さんは私達の事を心配して下さつたのですか。私達はね、冬になるまで寒くておもてに出来ないのです。ですから暑い夏のうち、皆でセツセコく働いてお荷物を運んで一杯ためたのですよ。そして寒い冬の間中、このお家の中で皆で楽しく遊んで暮してゐるのです。おいしい御馳走も一杯ありますし、ストーブもこんなに暖かくもやしてゐます。道夫さん、こども達も遊んでいらつしやいな。」

道夫さんは蟻のこども達に冬のお話をして上げました。裸ん坊の木のお話や、霜や氷や雪のお話を致しました。蟻のこども達は珍らしがつて大喜びでした。

道夫さんは蟻のお母さんが作つて呉れた甘いお菓子を御馳走になつてから、又もぐらのおぢさん三竝んで一緒に出掛けました。

少し行きます、ゲーゲー クークー スー スー いろくいな音が聞えます。それは、お屋根の大きな、茶色のお家の中から聞えて来るのでした。お家の入口はしまつてゐましたが、カヘルノオウチさいふ札がかけてありました。

「おや、こゝは蛙さんのお家なの？」

「え、さうです。一寸こゝから覗いて御覧なさい。」

道夫さんが背のびをして、その小さなガラス窓から中を見ます、まあ、多勢の蛙さん達が、暖かさうなおぶさんにくるまつて寝てゐるのです。

ゲーゲー ガーガー クークー スー スー 大きなびきで寝てゐるのはお父さん蛙でせう。小さな寝息でおねんねしてゐるのは赤ちやん蛙でせう。何時も元氣に泳いだり、さんだりしてゐた蛙さん、草臥れたのですね。眼を醒まさなげ様にソツソツ通りすぎませう。

道夫さんが歩いて行く道の兩側からは、細い小路がいく

つもわかれてゐます。

「その小みちを行くミ、龜さんのお家や、私達もぐらの家や方々へ行かれるのです。」

ごもぐらのおぢさんが話しました。

暫く行きますミ、向ふの方がバァーツツ明るくなつて、きれいなお家が見えました。

「あそこは草花さんのお家です。草のごきもがおほぜい居ますよ。」

もぐらのおぢさんがさう教へて呉れました。

草のごきも、みんなに可愛いミでせう。

道夫さんはぎんぐ馳け出して行きました。

みぎり色のお屋根のお家には、可愛いミ鈴が下つてゐて、紐がついてゐます。道夫さんが紐を引きますミ、リリーチリリリーンききれいな音でなりました。

するさみぎり色の着物を着たやさしさうな草のお母さんが、戸をあけて下さいました。

みぎり色の天井、みぎり色の壁、みぎり色のカーテン、何もかもみぎりのお部屋で、うすみぎりのお洋服を着たかはいミごきも達が、面白さうに遊んでゐました。おまミごきをしたり、縄ミびをしたり、かけっこをしてゐた草のごきも達が、皆道夫さんのまはりに集つて來ました。

「道夫さん、おもてはもう暖かくなつたの？私達も、もうお外に出ていミの？」

たんぼぼ、すみれ、れんげ草のごきもや、つくしんぼの赤ちやんまでが、聲を揃へてきミました。

「うん草のごきもがあまり一生懸命ですので、道夫さんはお返事に困つてしまひました。するさ草のお母さんが、

「お外はまだ寒いのですね。今出て行くミ、霜のおぢさんに白い冷いお帽子をかぶせられたり、氷のおぢさんにすきさほつた冷いお洋服を着せられたりしてしまひます。今に北風や霜や氷のおぢさんがさようならをして、あたミかい春風さんが來たら、あなた達もお外に出られるのですよ。それまでお家の中で遊んで待つてゐませうね。」

さやさしく仰云いました。道夫さんは、

「北風や霜や氷のおぢさんがさようならをしたら、すぐに僕がお迎へに來ます。皆でお手々つないでお外に出て一緒に遊ばせうね。」

可愛いミ草のごきも達にお約束を致しました。そしてトネルの様な道をもぐらのおぢさんに送られてお家に歸つて來ました。

今はまだ北風さんが笛を吹いておもてを馳けまはつてゐますね。霜や氷のおぢさんもまだゐますね。

でも、もうぢき、北風や霜や氷のおぢさんはさようならをして、北のお國へ歸つて行くでせう。

さうしたら道夫さんは、草のお友達をお迎へに行くでせうね。